

スタンダード研究会会報

(2011) No. 21

2011. 06.06

目 次

研究会発表要旨	
・ キリスト教と文明：スタンダールとシャトーブリアンの事例に即して(片岡 大右)	… 2
・ 拙稿「ファブリスは来たか 『僧院』異聞」をめぐる若干の補遺(富永 明夫)	… 4
・ 『アルマンズ』における決闘(田戸 カンナ)	… 9
・ 論評：高木 信宏氏の「『バイアーノの修道院』の出版をめぐる」(山本 明美)	… 9
書評(田戸 カンナ)	… 15
鈴木昭一郎先生追悼(岩本和子、粕谷祐己、住谷裕文、山本明美、寺西暢子)	… 16
会員活動報告	… 36
編集後記(杉本 圭子)	… 38

【研究発表要旨】

第 54 回 (2010 年 5 月 29 日 於 早稲田大学)

キリスト教と文明：

スタンダールとシャトーブリアンの事例に即して

片岡 大右

スタンダールは『ローマ散歩』中に 1829 年のコンクラーヴェについての報告を挿入し、そこでシャトーブリアン 折しも駐ローマのフランス大使であり、フランスの立場を代表して会議で演説を行った に対しての、例外的といつてよい称賛の言葉を書きつけている。「彼の演説は実に自由主義的で、私が少々多すぎるけれども、それを除けば魅力的で、大変な成功である。この演説は枢機卿たちの気に入らなかったのだ。」しかし、この称賛にもまったく皮肉が含まれていないわけではない。彼は続けて次のように述べているのである 「フランス政府についての個人的見解はどうあれ、イタリアでは、何者かであろうとして、彼は自由主義党派の保護者たることを強いられている。」シャトーブリアンの自由主義的発言は、彼自身の本来の思想に根拠を持つのではなく、状況により強いられたものとして提示されるのである。すなわち、宗教的・政治的な反動勢力のただなかで自己を際立たせるための方便として。しかし実際には、シャトーブリアンの発言は 1802 年の『キリスト教精髓』以来の持論の繰り返しというべきものである。キリスト教的伝統と新時代の諸要請とを折り合わせることこそが、四半世紀来変わらず、彼の根本的な賭け金をなすのだ。

さらに言うなら、1829 年のコンクラーヴェにおいてはそもそも、教皇選出に当たっての政治思想上の対立は事実上存在してはいなかったのであり、この点で、1823 年のコンクラーヴェとは事情が異なる。ピウス 7 世の死を受けて行われた 1823 年の会議においては、聖座の過去の栄光に固執するゼランティが枢機卿の多数を占め、ピウス 7 世の首相コンサルヴィにより代表される穏健派を圧倒していた。このコンクラーヴェを当初彩ったのは、両者の対立である。しかし、当時の主要なカトリック国オーストリアとフランス それぞれ宰相メッテルニヒと外相シャトーブリアンにより代表される は、穏健派を支持する点で一致していた。両者とも、急進的な進歩の訴えに歯止めをかける程度には

保守的で、しかしもはや取り戻せない過去の威光の復活を求めるほどには無分別な反動性を示すことのない、そうした教皇を求めていたのである。かくしてオーストリアの拒否権発動により、ゼランティの首領セヴェローリは脱落する。しかしだからといって枢機卿たちがコンサルヴィ派　ポリティカンティに属す候補に与するはずもなく、オーストリアもフランスも、それほど過激ではないゼランティの選出を受け入れる。こうして、残る有力二候補、ゼランティ中の穏健派カスティリオーニと、セヴェローリよりは少しだけ穏やかなデラ・ジェンガのうち、後者が選出されてレオ 12 世となったのである。

1823 年のコンクラヴェにはたしかに存在した、現代世界における教皇の役割をめぐる二つの立場の対立は、1829 年にはもはや消滅している。ゼランティの期待を担うに十分な反動性を帯びていたデラ・ジェンガは、ローマ教会の頂点に立つや、自らの党派の主張が同時代の国際関係の中では維持しえないものであることを悟った。そしてゼランティも、ほとんどコンサルヴィの路線と区別のつかない政策を取る彼らの教皇を眺めながら、時代の流れの逆らい難さを次第に受け入れていく。こうして、1823 年のゼランティは頑なな少数派を残し、1829 年までに穏健派へと移行していたのである。今回の有力候補はカスティリオーニとデ・グレゴリオであるが、1823 年にはゼランティ中の穏健派であった前者はいまやまったくの穏健派となっており、後者はシャトーブリアンによれば、「ゼランティの一人ではあるけれど、穏健さを欠いているわけでもない」。残るのはただ関係各国の思惑の対立、さらには主要な交渉当事者たちの個人的野心相互の対立にすぎなかった。「今日、コンクラヴェを導いているのは何よりも個人の利害関係である」、1829 年の駐ローマオーストリア大使はこのように述べている。シャトーブリアンが支持したデ・グレゴリオは敗れ、オーストリアの代弁者たるアルバーニ枢機卿の推すカスティリオーニがピウス 8 世となるが、この争いのうちにはそれゆえ、政治思想上のいかなる賭け金も見出すことができないのである。実際、シャトーブリアンの演説に対するカスティリオーニの応答を、スタンダールは未来の教皇の無理解の証しとして捉えているけれども、「ローマが啓蒙の光と芸術の敵であると非難する者を否認する」意志を表明し、布教聖省の学院による「学問上の発見、知識の進歩、最も野生的な人民さえもの文明化」への貢献を強調する彼のメッセージを、シャトーブリアンのメッセージと完全に異質のものともみならずことはできないだろう。19 世紀前半における「文明」の理念はほとんど満場一致の支持を得ていたのであり、とりわけキリスト教とこの語が大いに親和的であることは、civilisation というこの語を今日的な意味で取り上げた最初の辞書がイエズス会ゆかりの『トレヴーの辞書』（1771 年版）だったことを思えば不思議ではない。こうして本発表は、教皇選挙をひとつの例として、18 世紀から 19 世紀前半にかけての「文明」の理念と宗教の関係を捉え直す試みの端緒となることを目指した。

拙稿「ファブリスは来たか？ 『僧院』異聞」への若干の補遺

富永 明夫

【まえがき】

二〇〇九年末、私は『現代文学』80号に《ファブリスは来たか？ 『僧院』異聞》なる一文を寄せた。その内容は大略以下の如きものであった。

『パルムの僧院』の終結部が、版元の意向により大幅に書き縮められたことは周知の事実である。ほとんど梗概のレベルにまで切りつめられたこの紙幅の中で、作者は主人公3人（クレリア、ファブリス、ジーナ）の死を二ページ足らずで語り去るという放れ業を演じた。それだけに、この部分は、作品の結構について作者の意を色濃く反映しているのではあるまいか。この観点に立ち、かねてから気になっていた一文（この小説の最後から二番目のパラグラフに含まれる）「Fabrice n'eût pas manqué un jour de venir à Vignano.」の邦訳を検討してみた。一九三五年以降約半世紀の間に世に問われた翻訳10種（必ずしも網羅性を期したわけではない）は、いずれも「ファブリスは一日も欠かさずヴィニャーノに来た」と読める文面になっている。ニュアンスに多少の違いはあるにせよ、ファブリスが来ていることは疑いようがない。

しかし、この文の主動詞 n'eût pas manqué は接続法大過去形（いわゆる条件法過去第二形）になっており、「主人公が欠かさずヴィニャーノを訪れる」という命題が非現実であることを伝えていると見るのが妥当である。従来の邦訳は、いずれもこの条件法的ニュアンスを読み落しているように思われてならない。

ファブリスは Chartreuse すなわちカルトゥジオ会修道院に身を寄せたわけだが、この修道会の戒律はことのほか厳しく、そこでの生活は全く隠修士のそれで、日曜と祝日には聖堂に会して聖務日課を唱え、食堂で無言のうちに会食をするが、その他の日は聖堂で修道院ミサ、晩課、朝課、讃課は誦するものの、その他の時間は各自の独居房で過ごすのみ。房はわけても祈りと観想と読書の場であり、食事・睡眠もここで済ませるが、睡眠は夜中の聖務日課のため三時間ごとに中断される。肉食禁止は恒久的であり、肌身を刺す苦行用の毛シャツは常時着用が義務。週に一度だけ許される外出も、健康維持のための長い散歩用にほかならない。なお独房には作業室が設けられており、修道士たちは絶対的沈黙のうちにそこで長時間手仕事に励むことが多かったという。そこから lavoro da certosino（カルトゥジオ修道士の仕事）という成句が生まれ、これは「根気の要る細かな仕事」を意味するそうである。

となれば、ファブリスが毎日のように叔母のサロンを訪れるという事態は想像しにくくなるというものだろう。スタンダールは『僧院』口述筆記の前年、『あ

る旅行者の手記』の中で、故郷ドーフィネの山中にあるラ・グランド・シャルトルーズ訪問記を書いており、その彼がファブリスの「終の栖」を名ざすのに、ことさら chartreuse という語を選んだのは仮初めの思いつきとは思えない。

ところが、杉本圭子さんに教えられて、Michel Crouzet の校訂版(2007)などの註を読んでみると、クルーゼ氏も、ファブリスが毎日のようにヴィニャーノを訪れた、と解しておられるようだ。そればかりか、カルトゥジオ会の戒律とファブリスのヴィニャーノ通いを両立させるために、彼が正式の修道士ではなく pensionnaire だったと考えればよい、という説を唱えておられることも判った。

しかし、と私は考える。ファブリスが日ごと叔母ジーナに会いに来るようでは、この小説の世界は崩壊してしまう。少なくとも私の『僧院』は霧消するほかない。問題のセンテンスを含むパラグラフの直前では、クレリア死後のファブリスの消息が実に淡々と、ほとんど即物的と言っていい筆致で綴られているが、その抑えた筆致こそファブリスの悲傷の深さを伝えて余りある。自殺こそしないが、ひたすら身辺整理に心を砕いたのち、彼は僧院入りを急ぐ。つまり三十そこそこの年ばえで、彼は生きながらわが身を葬るのだ。この場合、Chartreuse の名は墓標にも等しい。そして一年ののち、彼はいわば「往生の素懐」を遂げるのである。してみれば、小説の題名はまさに主人公の運命の要約そのものであり、かつこの一篇が「ファブリスの物語」であることを告げているのではあるまいか。

では、問題のセンテンスは何と訳すべきか？ 敢えて教室での訳読調を採用するなら「ファブリスも、本来なら一日も欠かさずヴィニャーノを訪れたはずなのだが」といったところだろうか。(ただし、この訳は、二〇一〇年末の別稿では「本来ならファブリスも、いずれはきっとヴィニャーノを訪れたはずなのだ[が]」と改めたことを申し添える。)

(I)

前掲の内容をもつ拙稿《ファブリスは来たか？ 『僧院』異聞》のコピーを昨年末知友の方々にお届けしたところ、多くの方からお返事を頂いた。中で最も早く頂戴したものの一つ、河野英二さんからのそれは、大いに私を驚かせた。実は、あの論考の中心をなす、接続法大過去形を含む一文 « Fabrice n'eût pas manqué un jour de venir à Vignano. » への翻訳の疑義は、今を去る三十数年の昔、ある学生さんから提起された問題に淵源するものだったのである。御当人は当時東大仏文科(本郷)の四年生だったが、私と同級だったN助教授の勧めに従って駒場の私を訪ねて来られ、問題の一文の邦訳について疑義を申し述べられたのだった。その時かぎりの短時間の会見であり、ぶっつけ本番の質疑応答だったから、当方には何の用意もあるはずがなく、きわめてお座なりの返答しか

出来なかったはずである。しかし、思い設けぬ衝撃的な内容を含む質問であり、深く心に残った「事件」であったことは言うまでもない。

ともかく、それが『僧院』受容史上、容易ならざる重みをもつ問題であることは直ちに感知できたし、それについて早く自分の考えをまとめて然るべく発言すべきだとも思ったのだが、実はなかなか筆が執れず、つい今日にまで至ってしまったのだった。

私の蒙を啓いてくれた学生さんとはその後顔を合わせる機会もなく、元来人の名前や容貌を憶えることがあまり得意でない私にとって、その名も顔立ちもいつか霧の彼方に霞んで久しくなっていた。その学生さん（影沢君）こそ、十数年来スタンダード研究会で毎々お目にかかっている河野英二さんにほかならぬということ、昨年大晦日の消印をもつお手紙に接するまで、私はまったく気づかなかったのである。名前という肝腎要の手がかりを失し（改姓という偶然も絡んだが）ために拙稿でまず第一に言及すべきだった点に触れられなかったことをお詫びするとともに、問題の指摘に関し priority は河野（影沢）英二氏にこそあることを改めて明記しておきたい。

もう一つつけ加えるなら、当時本郷で教えておられた Françoise Bloch 先生は、影沢君の質問に対し、同君の考えを強く支持する旨を明言された由であり、そのことを影沢君から聞かされたのを（なぜかこればかりは鮮明に）私は記憶していた。

(II)

鎌田博夫先生からも御返書を頂戴した。実は先生は御自分の『僧院』訳をお持ちであり、寡聞にしてその存在を知らなかった私は、残念ながら拙稿中でそれに言及できなかつたのだが、御来信により、当該箇所を知らることができた。以下の3行は御書信の一部を、先生の御許可を得て再録するものである。

《(…) ついでながら小生の訳を追加させていただくと、「・・・ファブリスはヴィニャーノへ行く日を一日も怠けなかつたはずである。」(研秀版「世界文学全集」・研秀出版社・昭50・8・15) となっています。》たしかに「・・・はずである」という表現は、この場合、直截に事実を提示するというよりも、可能性の一端を示唆している（「本来なら・・・怠けなかつたはずである」の意）と受けとることができ、とすれば原文の条件法的ニュアンスを十分伝えていると言ってよいだろう。従来のもとは一線を画する、貴重な訳例をお示しくださつた鎌田先生に厚く御礼申し上げたい。

(III)

以下は、ぜひとも会員諸賢のお知恵を拝借したい一件についてである。

拙稿《ファブリスは来たか？・・・》の中で私は、いったん勢いこんで自ら下した断案に自信が持てなくなり、旧知の杉本圭子さんに意見を求めた旨を告

白している。そのとき私がいちばん気にしていたのは、問題の一節 « Fabrice n'eût pas manqué un jour de venir à Vignano. » 中の «un jour» の扱いだ。拙稿で例示した諸訳は、ことごとく un jour を他動詞 manquer の直接目的語と解しているらしく思われるが*、私はこの manquer を de を介して目的語をとる間接他動詞と考え（従って目的語は de+inf.）、un jour は副詞句（状況補語）と解すべきではないか、と杉本さんに問うたのだった。（言うまでもなく、ne pas manquer de + inf. という語法は頻繁に見かけるものの、[ne pas] manquer un jour de + inf. という syntagme は、（管見ながら）ほかに見た憶えがない。ne pas manquer un jour pour + inf. という構文なら成り立ちそうにも思えるのだが・・・）

折返し杉本さんから頂いた返信は、この un jour の問題には触れず、もっぱら Michel Crouzet 編の Livre de Poche (2000) および édition Paradigme (2007) 所収の註釈を参照するよう促し、以って私の蒙を啓いてくださるものだった。さらに、後述する通り、Berthier 教授の私信の一節（メールらしい）も添えられていた。

Crouzet 氏の註釈については、会員諸賢はとうに御知悉のはずだが、要するに、僧院に退いた後もファブリスが毎日のように叔母ジーナのもとを訪れたのは自明であるとの立場に立っている。たとえば éd. Paradigme の註では、ファブリスは果たして正規の chartreux だったのかと問いかけたあと、氏は « La fin, accélérée, elliptique, nous dit qu'il se retire au monastère, et qu'il en sort tous les jours pour aller chez sa tante. » (p.510) と述べているし、また Livre de Poche の註には « La sortie libre de Fabrice pour des raisons mondaines » (p.646) という文言も見える。以上を自明の事実と前提した上で、それとカルトゥジオ会の厳格きわまる戒律とを両立させるために、氏は « séjour comme pensionnaire » (éd. Paradigme, p.510) という仮説を立てたのであった。

また、先ほど触れた、杉本さんの質問に対する Philippe Berthier 氏の返信の一部を引用させて頂くと、« Il n'y a absolument aucun doute que la phrase signifie : pas un seul jour Fabrice n'aurait manqué d'aller à Vignano. Il s'y rend quotidiennement et ne manquerait cette visite pour rien au monde. » ということになる。

御両所の、かくまでカテゴリー的な断言を前にしては、フランス語を母語とするわけでもない私は、ただ項垂れるほかない・・・はずである。しかし、それではこの小説の世界が崩壊してしまうのではないかと考える私は、その所存を《ファブリスは来たか？・・・》の92頁4行以下に敢えて記し、かつ問題の一文の試訳も掲げた。

が、それを草していたとき、私は Crouzet 氏らの註解の内容にいわば一種のショックを受けた状態にあった。最初杉本さんに質問を発したとき念頭を占めていた « un jour » の解釈に対する関心は、ために一時薄れていたように思われる。あの試訳はそうした事情のもとに生まれたものにほかならない。しかし、兼ねてから脳裡にあった、un jour を副詞句と取る読み方は、やはり頭をもたげてく

る。舌頭に千転すれば意自ら通ずなどというが、千遍は無理でも何十回かフランス文を読み返すうち、un jour を副詞句とする読みも許されてよいのではないが、という気がしてきた。副詞句とするなら、「いつの日か、いずれは」といったような訳語を当てるのが妥当だろう。そこで今ここに改めて提案する訳文は

「本文ならファブリスも、いずれはきっとヴィニャーノを訪れたはずなのだ」といったところである。

Crouzet 氏らの断言を前にしては、しょせん蠅螂の斧めくが、最後にもう一度だけ、わざ存念を繰り返して申し述べておきたい。やはり、ファブリスはついにヴィニャーノを訪れることなく、一年を閑したのち世を去ったのだと思う。もし彼が日ごとに叔母のもとを訪れたとするなら、《無言の行》を柱とする独房での禁欲的生活と、サロンを遊弋しつつ談笑にふける社交的生活との交代を、24 時間に 2 回のリズムで繰り返さなければならぬはずである。そんなことが果たして生身の人間に可能だろうか？ 修道生活が擬態なのか、社交生活が擬態なのか？ 彼はかりそめに『パルムの僧院』という題名をもつ小説の主人公なのではない。作者は最終ページに至って「僧院」を持ち出し、そこへファブリスを閉じこめた。彼がそこを出ることは、ついにないだろう。

さればこそ、ヴィニャーノの豪邸で華やかな社交に明け暮れるモスカ伯爵夫人ジーナは「一言で言えば、幸福のあらゆる外見 (toutes les apparences du bonheur) を一身に集めていた」と述べられてはいるものの、それはあくまで外見 (apparences) の問題であって、内実は少しも「幸福」ではなかったのである。なぜなら最愛のファブリスが訪ねて来ないからだ。(仮に訪ねて来るがあったとしても、それは「より良い世界でクレリアに再会すること」だけを念じている男にすぎない。)

だからこそ彼女は、ファブリスの死後「ほんの僅かな間しか」生き永らえることはなかったのである。傷心のあまり身罷る、灯し火の燃えつきるように生きることをひっそり止めてしまう という死に方は、スタンダールの作中人物にあっては決して珍しいものではない。それは彼らのいわば「特技」なのである。おそらくそれは、スタンダール以前の小説にも少なからぬ例があることだろうし、古い物語ではほとんど常套だったかも知れない。ともあれ、我々はすでにレナール夫人の死、クレリアの死を見ている。ファブリスの死、ジーナの死も、この列に加えてよいのではあるまいか。

* 因みに言い添えると、参照し得た 2 種の英訳も同様である。

◇ Fabrizio would never let a day pass without going to Vignano.

(Translated by the Lady Mary Loyd)

◇ Fabrizio had never missed a day in going to Vignano.

(Translated by G. K. Scott Moncrieff)

『アルマンズ』における決闘

田戸 カンナ

スタンダールはその生涯において何度か決闘しかけたのみならず、実際に決闘した人である。またこの作家は決闘に少なからぬ関心を抱いていた。作品世界では、ジュリヤン、オクターヴ、ファブリスというように主要小説の主人公は決闘する。ところが、スタンダールの人生や作品における決闘はお決まりの研究テーマには程遠く、これまでのところあまり研究されていないようである。

オクターヴの決闘は「面白い物語」を構成する、当代風俗を活写する、彼の貴族的性格をあらわす、彼の冒険物語、戦争物語を阻止するというように、同時にいくつもの機能を帯びている。この中でも、「面白い物語」を作る、当代風俗を描く、オクターヴの貴族的性格をあらわすという三つの機能は、小説家スタンダールの目的、願いそのものと合致する。スタンダールは、オクターヴの決闘という一エピソードを導入することによって、小説家としての三つの目的、願いを一遍に達成したと言えるだろう。

[論評] 高木 信宏氏の「『バイアーノの修道院』の出版をめぐって

アンリ・フルニエのポール・ラクロア宛未完書簡¹」

山本 明美

はじめに

アンリ・フルニエ書店が1829年8月22日に刊行した『バイアーノの修道院 Le Couvent de Baïano (CB)』はスタンダール研究者にとっての鬼門である。同刊本は現在までに唯一度1968年に主要部「年代記」のみが『スタンダール全集』第18巻に再録された。だからPh.ベルティエを始め²、誰もがこの作家の作品と思い

1 <https://qir.kyushu-u.ac.jp/dspace/handle/2324/16880>. 訳語やカナなどはなるべく高木氏の論文に合わせた。

2 Cf. Philippe BERTHIER, *Stendhal et la Sainte famille*, Droz, 1983, pp.50,205,206,212.

込んでしまう。ところが編者V.デル・リットは同巻「序文」(XVIII,I-LXXIV³)でスタンダールの作品ではないと明言している。

高木氏はこの度『CB』出版過程を実証する資料を発掘した。アルスナル図書館所蔵の「アンリ・フルニエのポール・ラクロア宛未刊書簡⁴」である。ラクロアとは「愛書家ジャコブ」の筆名で知られた当時23歳の博学な雑文家で、同刊本を構成する「序文 Avant-propos」、「16世紀の修道院についての考察 Recherches sur les couvents」、「史話 Récit」、匿名著者 J...C...o による「年代記 Chronique」、「人名 Noms」、「註 Notes」の6パート中、第2部の「考察」を執筆した人物である。

高木氏は書店主フルニエがラクロアに宛てた手書き書簡15通のうち⁵、『CB』に関する書簡を9通特定して活字にしたばかりでなく、図書館側が記した各書簡の整理番号の順序の誤りを正した。この功績を先ず評価したい。

・フルニエの書簡概略

高木氏はフルニエの同9書簡中日付のない7書簡を1829年7月初旬から8月の出版直前までに送ったと見る。そこでどういう事実が読めるか。フルニエはラクロアに「ナポリの貴族」から「譲られた」「イタリア年代記」と呼ぶ *manuscrit* をラクロアに届けては執筆部で「年代記」の「内容を予告する」よう依頼し、「序文」や「題名(本扉)」を送っては訂正・加筆を求め、「史話」「注釈」などの関連資料も見せている。その上でラクロアから順次原稿を受け取っては校正刷りを渡して点検させ版を組み、出版に先立って新聞各社に称賛文を掲載させる手配もしている。

・高木氏の論考

高木氏はこれらの書簡により、A.コルディエによって作成されたスタンダールの蔵書目録が「まったく根拠を欠く憶測」(p.93)と結論する。すなわち同目録が、『CB』の半ばを占める「序文、解説」の執筆者をラクロアとしたのに対し、同人物を「消極的な協力者」(p.91)にすぎないと見、その後続く「年代記」を「スタンダールの翻訳」としたのに対しても、「信憑性はきわめて薄い」(p.94)としている。この二人に対し、フルニエは「企画から編纂、宣伝までをとり仕切っている」(p.90)と見る。また、フルニエに「イタリア年代記」を「譲った」人物はナポリの貴族であり、スタンダールが『CB』の2週間後に出版する『ローマ散策』で関連情報を書き込めたのは、1825年に知り合ったフルニエから情報を得たためと見ることで、デル・リットの説を首肯した。

3 Bibliophile 版 *Œuvres complètes de Stendhal*.

4 Arsnal - MS-9668 (1) -, Bibliothèque nationale de France.

5 ラクロアがアルスナル図書館の管理人をしていたことから彼が受け取った書簡が保管されたとされる。

・ 論評

1. 書簡にみる3者の役割

ラクロア

高木氏はラクロアに関するコルディエの記述が見当違いであることを実証した。とは言え、この点は既に刊本の体裁に現れている。「序文」には「序文」執筆者がラクロアに寄稿を依頼した旨が述べられている上、「人名」にも「註」にもラクロアの執筆部である「考察」から一語も拾っていないからである。これは、予めラクロアの「考察」以外を版に組んだところへ、ラクロワから原稿を受け取って編集した手順と一致する。

フルニエ

高木氏の主張する成果は編集を担ったフルニエの役割であるが、同刊本には既に「書店」の記載があることから、編集も兼ねていたことは推測できる⁶。但し、フルニエは「企画」までしたのであるだろうか。高木氏はフルニエが「関連文献を収集して物語の信憑性を自ら確かめたうえで6つのパートからなる本書の構成はもとより、『序文』『史話』『注解』のテキスト作成にも少なからず関与し出版に踏み切った」(p.90)と述べている。

高木氏の訳語には注意を要する。書簡でフルニエがラクロアに返却を求めた「イタリア年代記」の *manuscript* を「写本」と訳し、これを「刊本のなかで『Chronique』と題される仏訳テキストそれ自体ではなく、その底本となったイタリア語の写本を指す」としている。また、この *manuscript* が「本物」であるかどうかを確かめるため「(*manuscript*) を私に譲ってくれた人物が、この題材に関して印刷された小冊子を一部、とり寄せるように私に言ってくれた」「小冊子 brochure」は、「1820年にナポリでカラブリアの医師が出版した印刷物」(p.91)としている。しかし、後者は前者を要約した異本にすぎず、事実関係を検証する役には立たない。

ここで言う「小冊子」とは『CB』の「序文」に参考文献として言及されている『ナポリおよびアラゴン王国ナポリ人飛地で起きた恋愛事件と悲劇』(p.viiij)のことで、17~18世紀にコロナ兄弟が収集したナポリの逸話集である。他方、高木氏が「写本」と訳した *manuscript* はむしろ氏の否定する「手稿」のことで、「Chroniqueと題される仏訳テキスト」と思われる。出版直前に印刷業者の手元に戻す必要のあった *manuscript* は「手稿」の方に違いない。

フルニエは1825年にスタンダールの『ラシーヌとシェイクスピア』、パンフレ『工業家に対する新しい陰謀について』を印刷したことが知られている。書簡は作家がフルニエに宛てた1827年4月12日付けの1通が知られるのみである。とは言え、そこに「私のささやかな印刷を開始するのをなお2週間待ち

6 印刷業者にすぎなかったフルニエが書店経営免許を取得するのは1835年とされる。Cf. Nicole Felkay, « Stendhal et l'imprimeur Henri Fournier », *Stendhal Club*, N°90, 1981, p.138.

ましよう」と書かれている。高木氏がこの書簡に触れながら、二人の関係は「1826年以後は」「明らかではない」(p.97)と述べているのは、デル・リットに倣い「ささやかな印刷」を『アルマンス』と見なしたためである⁷。だが同小説を印刷したのはフルニエではない以上⁸、スタンダールが印刷を託したはずの原稿の存在から目をそらすわけにはいかない。

高木氏はまた作家が作成した1835年の自伝遺贈先にフルニエの名があることにも触れている。高木氏は12月24日付のリストしか挙げていないが、実際には11月29日から計4通の遺書にフルニエの名があり、書店としては常に2番手に位置し、3種もの紀行書を請け負ったドロネー書店⁹の前に位置づけられてさえいる(XXXVI,291-293)。10年前に上記2文献を印刷しただけのフルニエ書店が、何故これ程重視されていたのか追究すべきである。

ナポリの貴族

ナポリの貴族は *manuscrit* の「譲渡者」である。では、「年代記」、「史話」、「註」は誰が作成したのか。高木氏はフルニエが「関連文献を収集」したと考えているが、書簡Iにあるようにナポリ貴族の「提案」があったからである。なるほど、「史話」に「レシ」と題名をつけたのはフルニエであろうし(p.103)、書簡でフルニエは「私の挿話 *mon épisode*」(p.104)と言い、「お目にかけてお役所書類のなかから選んだ文書で増量した史話と、どうにも欠かせない注釈のせいで長くなってしまった年代記の冒頭」(p.104)と述べている。だが同書簡では「巻頭言について」「提案されている *On me propose*」(p.105)とあり、書簡では「雑多な断片などは不適當で不要なものがあったので *comme il y en avait*」(p.105)と過去形で述べている。出版直前の書簡では「彼[ラサーイ氏]を私の人物 *mon personnage* に差し向けた」(p.112)とある。こうしたことから、ナポリの貴族とされる人物は「年代記」とともに「史話」や「註」の原稿を関連文献とともにフルニエに譲りはしたが、そのままパリに留まり相談にに応じていたと見るのが妥当であろうし、使者にすぎなかった可能性も考えられる。

残るはナポリ貴族の正体である。書簡では「自分の名を決して公表できない」人物(p.105)とあることから、フルニエはこの人物から口止めされていたことが分かる。高木氏はこの人物がスタンダールの知人という見方をしている。それは次の事実から当然行きつく推理である。

2. 『ローマ散策』の情報源

『CB』問題は同刊本にスタンダールの著書との無数の類似点や複数の引用が

7 ゴーチエ・ラギオーニである。Cf. Stendhal, *Correspondance générale*, Édition V. Del Litto, , Honoré Champion, 1999, p.622.

8 Cf. Felkay, pp.135,138. / *La Bibliographie de France* du 18 août 1827.

9 『ローマ、ナポリ、フィレンツェ(1817)』, 『ローマ、ナポリ、フィレンツェ(1826)』, 『ローマ散策』.

賛辞とともにあり署名があるだけに留まらない。作家は同刊本の2週間後に出した『ローマ散策』で同刊本の内容を事前に知らなければ不可能な関連情報を挿んでいた。殊に1828年10月1日付の旅日記には「バイアーノの修道院廃絶を語る手稿を閲覧した」(,352)とある。彼は誰から情報を得たのか。高木氏はD.フィオリ、A.ミシュルーとフルニエの3人に絞った上でフルニエを推している。私は前二者を含むナポリの自由派からであろうと推測している。1821年までの7年間ミラノに滞在した作家は彼らから様々な情報を得たからこそ『ローマ散策』に歴史家顔負けの諸事実を書き込んでいるからだ¹⁰。1828年秋の時点で源泉を入手しなら、スタンダール自身が翻訳するのは困難ではなかったはずである。

私は何故このように推測するのか。『CB』の出版から3ヵ月半後にあたる1829年12月9日の覚書で、スタンダールは他人の発案に見せかけて成功した例をフランクリンの手紙から引き、「私はそれら[手紙]を読む前に[予め]書いておいた、[その結果]聖パウロがJ.-Cを考案しこうしてそれを利用した J'avais écrit avant de les lire que saint Paul en usa ainsi en inventant J.-C.」(XXX ,47-8)と大過去を用いて出版「戦略」を明かしている。これはパウロ、ことポール・ラクロアが、「年代記」等の内容を知った上で「考察」を執筆した編集経緯と一致する¹¹。フルニエに *manuscrit* を譲ったのが「ナポリの貴族」であり、スタンダールの知人なのであれば、原稿を託しフルニエに譲らせるのに当時作家と同宿のミシュルーを仲介者にした可能性は濃い。

高木氏はスタンダールの情報源をフルニエとした根拠を、作家による「修道院廃絶に関するイタリア語手稿〔1820年異本〕」入手時を1839年〔4月8日〕(XVIII,L-LI)とし、『CB』刊本入手を1842年3月15日以降と見なすことで、『CB』出版の1829年時点では所有してはいなかったとするデル・リットの説を踏襲している。だが前者の異本については1週間後に作家が同一の写本を複数所有している書付がある以上(XVIII,307)、『CB』出版前から手元にあった可能性は生きている。刊本については、根拠にした作家の覚書(XVIII,349)中の «*relié*» を高木氏は「製本済み」と訳しているが「装丁された」と訳すべきである。作家の宿所から見つかったのは作家の所望していた「装丁本」ではなく「仮綴本 *brochure*」(XLIX,227)であり、高木氏の推測するように翻案の土台にしようにも作家の死までに1週間しかなく、スタンダールが『CB』を剽窃したというデル・リットの説は成立しなくなる。大家はそこでこの覚書を3年前にずらし1839年のことにしている(XVIII,xvI)¹²。

10 CASAMASSIMA (Franco), *Le récit de la révolution de Naples dans "Rome, Naples et Florence"*

Stendhal considéré comme source historique, , *Stendhal Club*, N°61, 1973, pp.50-68.

11 Cf. 『フランス語フランス文学研究』第95号, 2009, p.210.

12 Cf. 『フランス語フランス文学研究』第88号, 2006, p.166.

3. 「スタンダールの翻訳」か

要するに、作家の死後パリの宿所からは『CB』の仮綴刊本 (brochure) と 1820 年異本 (brochure) の写本 (MS179) が発見され、作家の蔵書目録に『CB』「年代記」は「スタンダールの翻訳」と記載された。高木氏はコルディエがこのように記載した根拠は「コロン覚書の転写部分」にあることを一旦は認めている (p.94)。「覚書」は同異本を「ベールがこの話を写しとらせていた小冊子 *La brochure sur laquelle Beyle avait fait copier ce récit*」 (p.87) と説明している。この大過去はスタンダールが刊本『CB』入手以前に「小冊子」を転写させていたことを示しているからである。

高木氏は「これは『バイアーノの修道院』の翻訳にもちいられた底本とは異なるテキスト」 (p.100) であると思っている。確かに『CB』「序文」では 1610 年作成の原本の方を翻訳したかのように述べてはいる。しかし私自身が「年代記」本文を 1820 年異本と照合した結果一致する上¹³、デル・リットも同異本を『CB』「年代記」の底本と見なしたためビブリオフィル版第 19 巻に収録したのである。

むすび

高木氏によって発掘された未公開書簡が氏の拒絶するスタンダール執筆説を補強する結果となるのであれば、それは氏による活字起こしが誠実であった証であろう。生前不遇の作家であったスタンダールは巧妙な出版「戦略」を練っていた。『CB』問題はスタンダール研究野で今なお探究すべき欠落を見せる。高木氏の論考が熟すのを待ちたい。

【Observation critique】

Nobuhiro TAKAKI, Quelques remarques sur la publication du *Couvent de Baïano* : Lettres inédites de Henri Fournier à Paul Lacroix

Si les lettres inédites fouillées par M.Takaki ont pour résultat de donner des armes contre lui-même qui récuse l'attribution à Stendhal, cela prouverait la conscience de sa mise en caractère d'imprimerie. Écrivain infortuné de son vivant, Stendhal élaborait une «politique» de publication. La question du *Couvent de Baïano* nous laisse voir encore une faille à explorer dans le champ des études stendhaliennes. Nous voudrions attendre que M.Takaki mûrisse ses considérations.

Akemi YAMAMOTO

13 疑う余地が他にもある。「年代記」末尾で翻訳者 J...C...o は、1820 年異本にある「O.....氏」のメモについて「この名はナポリ古文書館に保管されている手稿を終わりまで調べても見つからなかった唯一の名である」(CB,226)と脚注を入れ、翻訳の底本が「手稿」(原本)とは異なることを明かしているからである。「O.....氏」のメモは 1820 年異本の著者 G...M...が挿入したのであろう。

【書評】

Odile Métais-Thoreau, *Une femme rare : dans les pas de la duchesse de Duras*, Éditions du Petit Pavé, 2010, 182 p.

田戸 カンナ

デュラス公爵夫人の生涯とその作品に関する研究書としては、1910年にガブリエル・ペレスによって『デュラス公爵夫人とシャトーブリアン』という大著がペラン書店から出版され、この著作はその後今日に至るまでデュラス夫人研究の指針になっている。この大著の発表からちょうど百年を経た今改めて、デュラス夫人の人生と作品を真正面から論じた研究書が出版された。それが本書である。

本書は大きく第一部、第二部に分かれ、「眠れる森の美女の目覚め」と題された第一部では夫人の人生が伝記的に語られ、とりわけシャトーブリアンとの関係に多くのページが割かれている。第二部は「サロン、友人たち、デュラス夫人の文学作品」と題され、そこではまず、デュラス夫人がどこのサロンでどのような人たちを迎え入れていたのかが語られ、具体的に客人の名前が数多く挙げられる。この中にスタンダールの名前はない。その後は『ウーリカ』、『エドゥワール』、『オリヴィエあるいは秘密』の三作品がストーリーを中心に紹介される。著者の専門が歴史であるためか、三作品については文学的に掘り下げた分析はなされていないものの、作品の内容と伝記的事実の関係などについて興味深い指摘がなされている。

ペレスの著作が入手しにくい今日、本書はデュラス夫人の生涯と作品を手早く概観するには打ってつけの書物である。

鈴木昭一郎先生追悼

去る5月3日、長らく本研究会の代表者をおつとめくださった鈴木昭一郎先生が逝去されました（享年83歳）。ここに先生のご業績とお人柄をしのび、会員諸兄から寄せられた追悼文を掲載いたします。

（杉本 圭子）

鈴木先生へ

岩本 和子

直接講義などを受けた学生や弟子というわけではなく、スタンダード研究者としても私ははなはだ中途半端なままで今日に至っています。それでも振り返ると、多くの著書や論文を読ませていただき、また学会、研究会、そして個人的なご指導を通して、これまでスタンダードの研究を続けてきた道において、私にとっては鈴木先生がいちばんの師であったと思います。私が先生と関わらせていただいたことについてここに記し、改めて感謝の念を伝えさせていただきます。

1987年秋、学習院大学で私は初めての学会発表をしました。そのときに司会をされたのが鈴木先生でした。たしか前日ぎりぎりに発表原稿をお送りし、私は極度の緊張状態の中にいました。当日分科会の部屋で先生にご挨拶したとき、厳格な学者然として、しかし何か優しい言葉で挨拶を返して下さったこと（怖いという印象は残ってないので）、それが先生との出会い、そして私の「スタンダード研究デビュー」の記憶です。

白水社の『スタンダード研究』における戯曲に関する論文、そして何より「年譜」は、スタンダード研究者の誰もが参照してきたものでしょうが、私も論文を書くたびに必ず確認し拠り所とする「必需品」でした。さらに人文書院の『スタンダード全集』、清水書院の『スタンダード』、青山社の『<評伝>劇作家スタンダード』などなどから、多くの知識や示唆をいただきました。また「年譜」のお仕事についてのいきさつなどを『流域』に寄稿されたことがあったと思いますが、デル・リット先生からも受け継がれたと思われるスタンダード専門家としての「職人気質」、研究者のあるべき姿、仕事への真摯さや厳しさといったものを教えられ、衝撃を受けました。

スタンダード研究会はすでに発足して 20 年になります。住谷さんの発案で、当時阪神間在住の「若手」だった柏木さん、粕谷さん、私の 4 人で始まり、まず関西を中心にメンバーが集まり、会場は芦屋からやがて京都へ移し、その頃鈴木先生も何度か参加して下さいました。学会発表時の緊張の中と違い、直接親しくお話しさせていただく嬉しい場所となりました。

その頃から（確か 1992 年冬から）青山社の季刊誌『流域』に、アンリ・ベールとポーリーヌの書簡を材料としたエッセー連載を書かせていただくことになりました。やはり相当「職人気質」の編集者が赤ペンで真っ赤になるほどの添削や細部確認、さらなる調査と「註」追加の要求をして下さり（ありがたいことでした）、数回の校正を経てのけっこう大仕事でした。（個人的には大学の仕事に加えて子育て真っ最中でもあり、家事の合間の必死の時間作り、徹夜に近い状態など当時の凄まじい生活の記憶が刻み込まれたものです。）ただ、季刊とはいえ（予約購読された方はご存知のように）年に 2、3 回くらいの発行だったのでなんとかペースについていったという感じです。そしてやっと掲載された「スタンダリアーナ アンリ・ベールとその妹ポーリーヌ」、それを鈴木先生は毎回すぐにていねいに読んで下さり、あの達筆で、葉書や手紙に感想や誤訳・事実誤認のご指摘などを書いて送って下さいました。（校正を経てはまだ恥ずかしい間違いをよくしていました）。時には関連するちょっとしたエピソードも添えて。例えば（どこかで公にも書いておられたかもしれませんが）「デル・リット先生が＜ポーリーヌに子供が一人でもいたら、あんなに不幸ではなかったかもしれない＞と言われたのが忘れられない」と教えて下さったことが私も忘れられません。

また、かつてデル・リット先生と一緒に訪ねられたスタンダードゆかりの地で撮られた写真のネガ（40 枚撮りフィルム 2 本分）を、「好きなようにお使い下さい」とポンと郵送して下さいました。その中にはグルノーブルの街中のグルネット広場や生家、ガニオン家、教会、バステューユなどはもちろん、アントワヌ・ベルテの生家や、家庭教師に入ったミシュー家、そして人手に渡って一般人には入れないポーリーヌの嫁ぎ先テュエランの館の内部 デル・リット先生も何枚か写っています の写真もありました。すぐにすべて現像し、ネガはお返ししました。このテュエランの写真を私の文章とともに使わせていただく光栄に浴しました。

連載をまとめて青山社から単行本にしていただく際に（「職人気質」の編集者は、研究ともエッセーともつかない、作家とポーリーヌのどちらが中心なのか曖昧だった私の文章に、進んでゴーサインは下さりませんでした）、鈴木先生は快く推薦の手紙を書いて編集者に送って下さいました。（もちろん私からお願いしたのですが。）それに意を強くして私も直接単行本にしたい意志を何度かお伝えし少々書き直し、そして連載終了後 5 年ほどしてから刊行となったのです。その「序文」も鈴木先生は執筆して下さいました。『スタンダードと妹ポーリーヌ』

『又 作家への道』(2008年)は本当に鈴木先生にお世話になった、その成果です。(研究会のみなさまにも連載中から多くのご教示や励ましのお言葉をいただいたこと、この場を借りて改めて御礼申し上げます。)

そして最後の鈴木先生との思い出です。2008年9月、先生から郵便物が届きました。またあの達筆でカードが一枚、同封の本を二冊下さる旨と、その最後に「西宮から京都へは遠いけれど、涼しくなったらいちど遊びにいらっしませんか？」お会いして本刊行のお礼をきちんとしたくもあり、お言葉に甘えて9月20日に京都の先生のお宅を初めて訪問しました。この日、ちょうど私が乗る直前に阪急甲陽園駅で列車の脱線事故があって、電車で5分の夙川駅まで40分も並んでタクシー相乗りし、大混乱の中、結局30分遅れで先生のお宅に到着。奥様とお二人で待っててくださいました。出版祝いにとたぶんかなり高級のワインを開けてくださって、乾杯。その6年前から崩されていた体調もちょうど回復されたところでした。私にとっては、先生とこのようにゆっくりと、先生のプライベートなことまで含めてお話させていただくのは初めてでした。お子様がいらっしないことなども。そのときポーリーヌに関するデル・リット先生の言葉、むしろそれに対する鈴木先生のこだわりを思い出しました。

また機会あればお訪ねしたいという願いも、研究会にもまた顔を出していたきたいという願いも叶えられませんでした。でも折に触れての数々のお言葉やお便りに支えられて、私にとってのこれまでのスタンダード研究の(細々とした心もとないものですが)歩みはあったのだと思います。もういちど、先生に、心から御礼申し上げます。

ご冥福をお祈りいたします。

鈴木先生のこと

粕谷 祐己

鈴木先生にはわたくしが京大の学部生であった頃からご薫陶いただきました。わたくしをスタンダード研究に導いてくださったのは鈴木先生でした。

先生の授業というと、フランス語のスタンダード研究書などのコピー 最初のころはいわゆる「青焼き」でした をすらすらと読んでいかれて区切り

のところ、「はい、書いてある通りです」と言われ、たいして予習もしていない不勉強なわたくしはよくあわてさせられたのを覚えてします。

卒論をスタンダールで書こうと決めて先生のところにうかがったときは、Fernand Rudeの本を借り出していますと申し上げると「そうですか、それじゃそれを読んだらまた来なさい」と言われて、そのまま口頭試問までお会いせずじまいでした。Rudeの本が最後まで読めませんでしたから。いま考えてみると大学四年生にフランス語の研究書などなかなかまともに読めるものではないと思いますが、当時はそのような指導が当たり前でしたし、本当は今でもそれでよいと思います。あんまり卒論の出来が悪くて、名誉挽回のつもりでスタンダールのことを考え続けたのがずるずる今日まで続いてしまいましたが、人生とはそういう感じのものでよいと思うからです。

その後もときどき先生にお会いする機会があり、お教えを受けました。阪大で助手をしているころには集中講義で先生をお迎えすることができました。鈴木先生からうかがった多くのお言葉がわたしの心にコツンととどまって人生の指針となったように思えます。「仕事ってのはね、忙しい時ほどできるもんだよ」というのもそのひとつです。

ご存知の通り鈴木先生は「スタンダールの戯曲」というテーマに取り組みました。着想だけはたくさんあった戯曲をスタンダールはどれもまともに完成させられなかったのですから、たしかに奇妙な研究対象です。スタンダールがなぜ戯曲をひとつも完成させられなかったか、そのわけが分かったと先生がおっしゃるのを聞いたのは、*Stendhal et le théâtre* を公刊される二、三年まえのことだったでしょうか。「分かってみれば簡単なことだったんだ。スタンダールは恋愛のシーンがひとつも書けなかったんだ」と言われるのです。たしかに恋人たちの甘々のシーンはスタンダールには無縁です。幸せは感じるものであって描写すべきものではないし、描写すれば壊れてしまうはずのものなのでしょう。

お若いころ軍人を志された鈴木先生が終戦後にどうしてフランス語を、スタンダール研究を一生の仕事とされたのか、お尋ねしたことはありません。ひとしれぬ思いはいろいろおありだったものと拝察します。それでも先生は、お言葉はときに非常に辛辣であるもののきわめて温厚な方だと思います。

一度だけ先生に驚かされたのは98年ころパリでお会いして、ある中華料理店で御馳走になったときのことでした。支払いをされる時先生のクレジットカードの裏の自署を書き入れるところが空白なのが見えました。カード会社からカードが送付される時「お手元に届きましたらすぐに署名をお書きください」と指示されている、あそこです。クレジットカードも現在はセキュリティ対策がもっと厳重になっていると思いますが、当時はこれでは盗まれてしまったとき他人に自由にサインを書きこまれて使いたい放題になってしまうところでし

た。でもこれは書き忘れておられるのではなく、わざと書いておられないのでした。「絶対なくさない自信があるから」と先生は言われました。

その帰りに、酔っぱらっていたわたしはあやうくメトロの線路に落ちそうになりました。

鈴木先生の訃報に接し、お宅にご焼香にうかがい、先生の遺影を拝すると、かえって先生が亡くなった気がしなくなりました。先生へのご恩返しは、これからでも遅くはないと感じました。

スタンダールに寄せられたもっとも美しいオマージュ、エリアス・カネッティの『不死について』には、「文学的な、あるいはその他あらゆる私的な不死の観念についての考察は、スタンダールのような人間を対象にして始めるのがもっとも効果的である」(原文ドイツ語。岩田行一訳)とあります。カネッティの真意にかなうかどうかはともかく、「生きのこることからその棘が取りのぞかれるように」わたくしも語ってみようと思い、拙い文をしたためました。

鈴木昭一郎先生のご逝去を悼んで

住谷 裕文

スタンダール研究会の杉本さんからのメールで、先生のご逝去を知り、研究会からすれば家出をした放蕩息子にひとしいわたしであるが、先生への感謝のためにも、大学時代と会創設の経緯もふくめ、追悼の一文をしたためることをお許し願いたい。

わたしが大学に入学した当時、大学紛争が激烈で、十月ころまで授業はなく、大学にはバリケードが築かれ、連日のように討論会が開かれていた。そんな中で五六月のころ、英語仏語を第一第二外国語とするクラスの仲間で、自主講座の話が起こり、鈴木先生がたまたまわたしどものクラス担任で、またフランス語教室の教授でもあったところから、同級だった故吉田城さんや林博司さんなどがおそらく先生にお願いし、講読が始まった。テキストはカミュの『ペスト』で、初級文法の知識もあやしげなわたしどもに、読解は困難をきわめたが、先

生はそういうわたしどもにも根気強くおつきあいくださった。そのうち十一月には授業も開始され、わたしどもはあらためて先生から初級文法を教わった。また、二回生のときにも、同級の多くの仲間が先生のLLの授業を受講したが、使用したのは当時としては斬新な、アメリカで制作されたフランス語会話教材だった。

また、先生とのつながりは授業ばかりではなかった。当時は学生と教官の対立は険悪であったし、同じ級友同士にも抗争があり、学内は殺伐としていた。そんな中で、授業が開始されると、クラス仲間の交流を求める気持ちが高まり、みなでハイキングを行ったりしていたが、そのうちコンパの話が持ち上がり、わたしも幹事の仲間に加わり、先生に参加のお願いをした。クラスには田舎から来ている学生も多く、今出川の鴨川にかかる橋の見える料亭で、先生がにこやかに接してくださったことで、ようやく人心地のついた感じだった。

ところで、研究者としての鈴木先生は、人文書院の「スタンダード全集」刊行からも察しられるように、桑原・生島両先生の衣鉢をつがれるとともに、デルリット先生への私淑を原点に置かれていた。その実証的な研究姿勢は、中川久定先生のそれとともに、わたしの考えではプルーストのマニユスクリ研究で世界的な故吉田城さんが、もっともよく受け継がれたのではないかと思う。わたしの方は、大学院時代に、ある席で桑原先生にお目にかかったおり、先生の文学観について批判めいたいくつかの質問をし、たいへんな叱責を買ったこともあれば、師である中川先生にも、大目玉をくらうような存在で、つまるところ、学とは縁遠い、たんなる文学好きに、いまなおとどまっている。したがって、いまから二十数年前、柏木さん、岩本さん、粕谷さんたちと、スタンダードの全国的な研究会がないのはおかしいから、若手で結束して創設したらどうかと話し、そのあと鈴木先生に相談にうかがったとき、一瞬先生がげげんな表情をされたのは当然である。

先生は、自分も研究会の創設を考えたことがあるが、なかなかむずかしかったとおっしゃり、わたしどもの計画に快く賛同し、協力を約束してくださった。このことがはずみになって、全国の先生また若手研究者の参集がえられるにいたったことは述べるまでもない。当初、事務局はわたしの研究室に置いたが、六七年してわたしにルナル全集の翻訳の仕事がまわってきたのと、こともあろうに自分の住む芦屋で、子供の通う保育所と小学校の前にガソリンスタンドを建設するというので、住民運動を立ち上げる仕儀となり、研究会には疎遠な存在になってしまった。しかし会報や人づてに、先生の温かい助言や励ましが、研究会に新しい実りをもたらしつつあることを知り、嬉しく思った。ただわたしのような不器用な人間には、ルナルと住民運動のあと、すぐ研究会に復帰することは難しくなってしまった。これらのことをほとんどご存じなかった先生には、わたしはいっそう奇妙に思われたことであろう。

先生のお姿を最後に目にしたのは、吉田城さんの告別式のときであったか、それともシュヴァリエ勲章と出版記念のお祝いのパーティーでのことであったか、わたしの記憶はすでに曖昧である。家出をした放蕩息子は、先生から真剣に学ぶこともなく、先生はついに幽明境を異にされてしまった。そればかりでなく、わたしは研究会創設にあたってご協力くださった先生方にも、非礼をつづけたままである。昨年、富永先生から抜きずりをいただいたが、いまだご返事を差し上げられずにいる。先生のいだかれた疑問を無視しているからではない。わたしの胸中には、会に疎遠になる以前から、他の会員諸氏にはあまりにも明瞭で、意識されることもないであろう、ひとつの疑問が巢食い、しかもそれがしだいに大きくなりつつある。それは「結晶作用」をめぐるものである。研究のテーマとしてはあまりにもありふれ、しかし取扱いにはなはだ困るこの現象を、わたしは諸先生にも、そして亡くなった鈴木先生にもお尋ねすることがはばかられた。

それは『イタリア年代記』の「カストロの尼」の一篇にかかわっている。エーレナの自分の命を絶ってジュリオの胸に現前しようとするあの行動ほど、スタンダールの結晶作用の現実を能動的にとらえたものはないであろう。エーレナは恋する者にはあまりにあきらかなこの現象を、明確に把握している。生きて愛する人に抱かれながらその目に咎めをみとめるよりも、身を犠牲に潔白をあかしすれば、その胸にいつまでも生きられる。自刃するのは、愛する者の胸にもっとも近く、否、愛する者のところそのものとなって、生きるためである。このことを彼女は電光石火に理解し敢行する。しかし、残されたジュリオはおそらく、レーナル夫人が、またファブリスがそうであるように、愛する者のあとを追うように亡くなるのであろう。このエーレナの行動、さらにまたジュリオのそれのような、スタンダールの主要登場人物を動かす魂の作用は、わたしたちの心に問い、想像力を働かせなければ、つかむことはできないだろう。それにしてもエーレナのこの果敢な決断をわたしは本当に理解できるだろうか？

現在のスタンダール研究会はきわめて専門的で精細になり、しかも鈴木先生の活躍されていた時代とはまた違って、つぎつぎすぐれた成果をあげている。ただわたしのような無頼漢にはスタンダールの、そして彼の小説の主人公の魂の動きが気にかかり、もしスタンダールが生きて横にすわってくれていたら、と思うことがある。スタンダールは思いっきり馬鹿なことを言う読者でも、真剣であれば笑って耳を傾けるであろう。われわれの研究会もスタンダールがうなずいたり、笑って聞いてくれるような、そんなくつろぎのある集まりになってくれればと期待する。

さて最後になるが、鈴木先生のご業績は、その実証的な緻密な性格によって、わたしどもにその成果抜きにスタンダール理解が迷妄に他ならないことを示されている。先生の温容をおしのびするとともに今後、そのご業績にもとづき、

さらにスタンダール研究を一步でも深めることは、研究会としての責務であるうし、わたし自身生前、先生に中身ある一篇の論考もささげえなかったことを、深く恥じるものである。

燻銀とマジンガーZ

山本 明美

あの燻銀の眼光を拝見できない。さみしいことである。

鈴木昭一郎先生との出会いは32年前になる。1979(昭和54)年の春、私は京都大学大学院文学研究科で開講されていたスタンダールの特殊講読『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』のゼミ室にいた。初講で先生は、この講読が諸君の関心を引く自信はないと言われながら、ふと一番前の席でビブリオフィル版を用意していた私に向かって、ここで扱うのは1826年の方ではありません、とご指摘になった。ゼミではこの旅行書の端々で院生らに辞典及び事典的な知識をご質問になりつつ、スタンダリアンらの実証研究をどう思うかと皆に疑問を呈されることがあった。このゼミには吉田典子さん(現・神戸大教授)も履修なさっていた。スタンダールが専門でもないのに当たると正確な下調べをしていることがゼミ生にわかった。鈴木先生が何で調べたかとお尋ねになった程である。先生は末席にいる私にも当てて下さった。アルフィエリについてだったことを覚えている。先生のお話で印象的だったのは19世紀における銃殺刑についてで、複数の執行人が発砲するいずれの銃弾が致命的な一撃になるか、受刑者には分からない仕掛けを説明なさっていた。

次に先生にお言葉をかけられたのは、1993年京都府立大のセミナー・ハウスであったと思うが、APEFが主催したフランス語強化合宿(スタージュ)で¹⁴、クリスマス・ケーキの執刀者としてご指名下さった時である。この合宿には2年後の1995年、阪神大震災で亡くなる中川努さんが企画ブレーンとして、前につんのめるような姿勢で駆けずりまわっておられた。

私にとってケーキよりも嬉しかったのは、この合宿の後で紫竹上高才町のお

¹⁴ 合宿については村田京子さん(大阪府立大教授)から情報を頂いた。

宅に、スタッフの方々とお伺いさせて頂けたことである。中川さんのライト・バンに便乗させてもらったのであろうか...先生のお宅に着く前に、凜然と杉林の並ぶ山麓の風景が通り過ぎた。古い木造和風家屋のひんやりする端正な佇まいは、若い私たちの熱気を快くさましてくれた。ご馳走の支度を待つ間、私たちはこの合宿の感想を J.-P. オノレさんに伝えていた。隣の部屋におられた鈴木先生は、私のフランス語の発音が分かりやすいとほめて下さったが、家屋自体が声のよく響く構造になっていた。書斎も拝見できた。リビングに接したその書斎の唯一の出入り口から覗くと、一段と低くなっている板張りの長方形の書斎はまるで船の操縦室のようだった。長方形の長辺は短辺の 4 倍はあったであろうか。日の明かりは向かって右側の短辺の窓からのみで、その窓に面し電話の置かれた先生の執務机を、書籍が整然と並ぶ三辺の壁空間が囲む格好になっていた。ご馳走は先生が「襦袢のようでしょ」と最後に出された、桜色の繊細な薄く透ける煎餅のほんのり甘い味しか覚えていない。

先生が京大を退官されて 8 年後の 2000 (平成 12) 年に、私は同大人間・環境学研究科に学籍を得、しばらくして拙論を二件先生に送った。最初の返書には「フランス語のスタージュにご尽力いただいた頃のことを懐かしく思い出しております」とあり、次のにも「今後ともぜひフランス語でお仕事を続けられるよう願っております」とあった。先生にとって私は、スタンダールよりフランス語朗読の山本であったらしい。封筒には、人が操縦室にいる飛行物体を頭部に搭載したマジンガーZ、の切手が貼ってあった。燦銀とマジンガーZ...このミスマッチはどうも消化できない。ともあれ、先生は操縦桿を握って今頃どこをご航行中か。

ご冥福をお祈りしつつ、思い出モザイクの一片になればと寄稿させて頂く次第である。



寺西 暢子

2006年6月23日。私は、ほぼ、一年振りに京都を訪れた。前年に急逝された吉田城先生の一周年忌に際し、京都大学で催された「プルースト・シンポジウム」とその晩の追悼会に出席するためである。その折、中川久定先生にお食事をご馳走していただく機会があり、その後、先生は、私が滞在しているホテルまで、タクシーで送って下さった。その帰途のタクシーの中であったと記憶しているが、鈴木先生のごことが話題に上った。鈴木先生は、毎年、必ず、1月1日にお年賀状を下さる。特に、これと言った何かを書き込まれて来られる訳ではないのだが、お葉書は、几帳面という言葉そのままに、いつも元旦に届く。ところが、その年は、なぜか、先生からお年賀状が二通、私の手元に送られて来た。表書きの名前と住所の文字は見慣れた先生の筆跡で、裏面もいつもの文面、二通ともそっくり同じである。単なる勘違いや手違いなら構わない。だが、その時の私は、二通、同じお葉書が届けられたことが気になった。残念ながら、中川先生も、お年賀状は頂いておられるものの、詳しい近況等はご存じなかった。その後、話題は、Béatrice Didierの著作 *Stendhal autobiographe* に逸れ、鈴木先生からの二通のお年賀状の謎は解けぬままだった。

*

「そっくり同じ二通のお年賀状」が、その時、私をひどく不安にさせたのは、他ならぬ吉田城先生の急逝があったからである。吉田先生が深刻なご病気と闘っておられた頃、私は、全く異なる種類の病に悩まされ、本格的な病気療養のために辞職せざるを得なかった。症状を悪化させないよう、外部からのありとあらゆる通信手段を断っていたため、私は、先生の訃報を知らなかった。先生が亡くなられたことを初めて知ったのは、先生の一周年忌の追悼会のお知らせを頂いた時であり、「京都大学フランス語学フランス文学研究室」が差出人の畏まった白地の封筒を開封するや、私は、そのまま、自宅の玄関先で、その場に座り込んでしまった。そして、思い出した。その年、つまり、2006年のお正月、吉田先生からのお年賀状は届いていなかった。「こまめな先生にしてはお珍しい。」とは思ったものの、私自身、体調が優れず欠礼していたため、「多分、お忙しいのだろう。」とあまり気にも留めなかった。今、振り返れば、気に留めている余裕がなかったのも事実であるが、私は、未だ、後悔の念を拭い去れない。病気療養中であったとは言え、もう少し、せめて、親しい友人・知人とだけでも連絡を取っていれば、ご葬儀に出席したり、追悼文集にささやかなりとも、一文を寄せることぐらいは出来たのではないか。

勿論、私が何かしたからと言って、吉田先生が帰って来られる訳ではない。

だから、今、ワープロに向かって居るのも、鈴木先生のため、と言うより、先生の訃報に接して、少なからず動揺している自分の気持ちを少しでも静めたい、と言う思いからなのかも知れない。『狂気じみた幸福¹』を、今更、持ち出すまでもなく、私自身、強い感情に囚われている時、言葉を探しあぐねることは少なくない。「言葉にならない。」「どう言ったら良いのだろうか？」その類の表現を思わず知らず使ってしまい、苦笑する。

だが、それでも、文章を紡ごうとする時、私は、掴み切れない思いを言語化することで、理性的に割り切るべく、思考している訳ではない。寧ろ、本能的とさえ呼べるような強い衝動に突き動かされているからこそ、「語ろう」とするのだ。

*

奈良女子大学の三回生の頃に受けた「フランス文学史」の授業中に聞いた話だったと思う。問題となった作家の名前まではもう覚えていない。フランス人同士の間では、気軽に「師弟関係である。」と言ったり、「先生」とか「弟子」とか呼んだりしない、と、教えられた。なぜ、その話が、強く印象に残ったのかは、自分でもよく分からない。ただ、その後、二年を経て、私は、初めてフランスに渡り、グルノーブル第三大学の修士課程に登録後、M. Berthier を指導教授として仰ぐことになる。すると、確かに、フランスにおける教員と学生との関係は、日本における「先生」と学生、あるいは、生徒との関係とは、かなり性質も雰囲気も異なる、と、身を以て感じる事となる。

鈴木昭一郎氏を、私は、ずっと「鈴木先生」と呼んで来た。

1986年の春、私が京都大学の博士課程に編入学してから、京都大学に籍を置いていた5年間、鈴木先生は、京都大学教養部の教官でおられた。しかも先生のご専門はスタンダールであり、私は、卒業論文、修士論文共にスタンダールの作品を取り上げ、その後もスタンダールの研究を、言わば、主な生業のひとつとして生きて来た。従って、私は、鈴木昭一郎氏を「鈴木先生」とお呼びしてしまうし、自然と敬語を使ってしまう。しかし、だからと言って、私が先生を「恩師」と呼べるのか、と問えば、考え込まざるを得ない。

直接、お目にかかったり、お話ししたりしたことは数える程しかない。京都大学に在籍しながら、講義を受けたことがない²。ある一定期間、京都大学の「仏文研究室」と言う同じ空間で、行き来して居ながら、そして、特に、相性の悪

¹ 『アンリ・ブリュラルの生涯』で使われている表現は、「un intervalle de bonheur fou et complet」(ヴァリエーション有り。)あるいは「Comment peindre le bonheur fou?」であるいが、「le bonheur fou」と言う短縮した形で、スタンダールが「幸福」を語ろうとする際に直面した困難について論じられる際、頻りに用いられる。

² なぜ、講義を受けなかったのか、言い訳をしようと思えば出来るが、ここでは子細は省略しておく。

い相手と言う訳でなくとも、擦れ違が多く、なぜか、ご縁の薄いひと、と言う方々が幾人かおられるが、私にとって、鈴木先生は、そう言った方のおひとりだった。それでも、二度目の渡仏から帰国後、一年半を京都で過ごした後、新しい勤務地に赴任した私に、鈴木先生はご著書をお送り下さった。そして、二十年間、変わることなく 病氣療養のため、私が欠礼していた四年間でさえ、欠かすことなく、必ず、1月1日にお年賀状を下さった。

鈴木先生は、私にとって、やはり「恩師」なのだろうか？

京都大学に編入学してから、いつ、何処で、鈴木先生とお目にかかり、どんなお話をしたか、かなりはっきりと記憶に残っているのは、二回だけである³。

他方、鈴木先生のお姿を、初めて、拝見した時のことは、よく覚えている*)。その頃、私は、まだ、奈良女子大学の修士課程の学生だった。フランスからヴィクトール・デル・リット氏が来日され、京都大学で講演をされた際、私も出席させて頂いた。教養部の教室だったのか、文学部の教室だったのか、記憶が曖昧なのだが、確か、文学部のこぢんまりとした講義室だったと思う。かつての国立大学らしい、お世辞にも綺麗とは言えない教室が目につかんで来る。当時、まだ、ご存命だった桑原武夫氏もお姿を見せておられた。デル・リット氏の講演に先立ち、鈴木先生が司会を務められた。その冒頭だったと思う。鈴木先生は、デル・リット氏をフランス語で紹介された。その時のフランス語の表現を正確に覚えている訳ではない。だが、先生が次のように切り出されたのは鮮明に私の頭の中に残っている：«M. Del Litto, mon maître...»（「私の師であるデル・リット氏をご紹介させていただきます。」）

*

私に、鈴木先生を「恩師」と呼べる資格があるのかどうか、と言う疑問は、ひとまず置いておきたい。いずれにせよ、私が«stendhalienne»であった以上、「鈴木昭一郎」と言う名前と無縁で居られるはずはなかった。いや、寧ろ、ごく早い時期から「鈴木昭一郎」と言う名前は、私の「生」の至る所に、絶え間なく、存在して居た。いつから、と、はっきり特定することは出来ないが、きっかけが、人文書院刊の『スタンダール全集』であったことは間違いない。当初は、奈良女子大学の図書館で借りていたのだが、学部の三回生になり、正式に「フランス語・フランス文学」を専攻することに決めた私は、家庭教師のアルバイトで得た報酬で、その頃、まだ、梅田の紀伊國屋書店に並んでいた『スタンダール全集』を時に一冊、次は三冊、多い時には四冊と、少しずつ蒐集し、四回生になる頃には、全巻、買い揃えることが出来た。そして、この『スタンダール全集』を読み継いで行くうちに、(生島遼一・桑原武夫両氏だけではなく)

³ そのうちの一回は、京大の楽友会館で行われた「スタンダール研究会」の(京都で行われた)最初の会合であった。

女子大にも非常勤講師として来られておられた鳴岩宗三先生は勿論、(以下、敬称略。)'西川長夫' '富永昭夫' '鈴木昭一郎' と言った名前に馴れ親しんで行くようになる。

以下、鈴木先生のご業績の中で、私にとって馴染み深いものにいくつか触れさせて頂きたい。いささか殺伐とした風情になるのは承知の上で、箇条書きのように列挙させて頂くが、お許し願えれば幸いである。

a)-1) 「スタンダール年譜」(『スタンダール全集(新装版)7 アンリ・ブリュラルの生涯』、人文書院、1977年、pp.402-371.)

a)-2) 「年譜」(『スタンダール研究』、白水社、1986年)

先に触れた「フランス文学史」の講義を受講していた学部の三回生の冬休み、私は、人文書院刊の全集の第7巻『アンリ・ブリュラルの生涯』を手にしていった。講義の後半の課題として、授業中、扱われた作家をひとり選んで、作品について論ずると同時に、作者の伝記的な事実についても纏めることを求められたからである。他にも、邦訳が手に入りそうな Alain や Thibaudet の『スタンダール論』や、大岡昇平の『わがスタンダール』なども探して、東京の大きな書店や神田の古本屋を回った。足で本屋を巡りながら、頭の中では、アンリ・ベールの足跡を追いかける。すると、自然と、鈴木先生が作成された付録の「スタンダール年譜」のページを繰ることが多くなった。

覚束無い語学力で『赤と黒』や『パルムの僧院』の Folio 版を読んでいる学生に、先生のお仕事の本当の価値など分かるはずもない。だが、うっかり油断していると、スタンダールは、直ぐ、どこかへ行ってしまふ。16歳で故郷を離れてから、その後は、転居、就職、遠征、転職、再就職、転勤、遠征、都落ち、帰国、新たな赴任、休暇による帰国、更に、そう言った人生の転機の間、さまざまな動機から、長期、短期の旅を頻りに試みる。勿論、大学院生になってからは、伝記も評伝もいくつも読んだ。それでも、頭の中の情報を整理し切れなくなる時、私は、度々、鈴木先生の「スタンダール年譜」に助けを求めた。

文学研究において、あるテキストと対峙する時、そのテキストが、いつ、何処で、どのような状況で書かれたのか、所謂、「genèse」を押さえておくのは最低限の仕事である。鈴木先生の「スタンダール年譜」を参考にすれば、単に、必要な情報が手に入るだけでなく、原典に遡ることも、非常に簡単だ、と言うことに、ある時、気がついた。そして、その事実が、先生のお仕事の緻密さと完成度の高さの証明である、と認識した時、私は、先生の「年譜」の持つ凄味に圧倒されたのである⁴。

岩本和子氏は、その著書『スタンダールとポーリーヌ 作家への道』の「あ

⁴ ここで話題にしているのは、主に、人文書院刊の「スタンダール年譜」の方である。今、手元にないため、確認が取れないのだが、『スタンダール研究』の「年譜」の方には、情報源となった典拠が記されていないなかったらうか？

とがき」の中で、鈴木先生が「職人氣質」とも言える姿勢で膨大なお仕事を積まれてこられた⁵」と評しておられる。鈴木先生ご本人もまた、『スタンダード研究』の「年譜」について、「個々の具体的な事実の提示はある程度まですでに (...)すませた⁶。」と、一定の満足感を滲ませておられる。『スタンダード全集』に「付録」として添付された「スタンダード年譜」は、まだ、お若かった先生が、その「職人」としての腕を存分に発揮された逸品であろうし、『スタンダード研究』の「年譜」は、更に、熟練された技術の粋を集めた傑作と言えるのではないだろうか。

b) 『スタンダード』(清水書院、1991年)

1991年の手帳を捲ってみる。専任教員になった私は、赴任先で、鈴木先生から送られたご著書『スタンダード』を7月23日火曜日に受け取っている。そのほぼ、一週間後の7月29日の月曜日にお礼状を差し上げていることまでは分かるのだが、残念ながら、まだ、ワープロもパソコンも使っていなかったので、お送りした手紙の文面までは残っていないし、何を書いたのかもはっきり覚えていない。書籍に残されている私自身のメモに依れば、読み始めたのは、同年の8月11日。つまり、お送り頂いて、比較的、直ぐだ。だが、読み終えたのは、約二年後の1993年5月23日となっている。1994-1995年に『赤と黒』を中心にスタンダードについて卒論を書いた学生が居たが、その学生に先生のご本を薦めた記憶がある。余談で恐縮だが、昨夏、その学生は、ご主人の海外赴任先であるイスタンブールから絵葉書をくれた。

周知のことだが、この『スタンダード』は清水書院の「人と思想」シリーズの一冊である。ご本をお送り下さった折に先生が添付されたお手紙を拝読する限りでは、先生は、このシリーズが「若い読者を対象とする」ものであると自覚しておられたようであるし、「必ずしも文学作品になじんではない青年たちのため」と言うことも念頭に置いておられたようだ⁷。しかし、実際に通読してみると、先生の『スタンダード』は、明らかに「入門書」の枠を大きく超えているように私には思える。先生ご自身、「あとがき」で触れておられるように、「ロマンチックという名の優しい崇高」«sublime tendre nommé romantique»を糸口に、スタンダードの「幸福」というものを考え⁸ようとされたため、先生の「読み」や「分析」が、初心者に必要な情報の提供よりも、優先される形となり、その結果、「入門書」と言うよりは、寧ろ、かなり専門的な研究書に近いものになっている、と言うのが私の見解である。後年、同じ「人と思想」シリーズの高山鉄夫氏が著された『バルザック』を拝読する機会に恵まれたのだが、高山氏の著作が、研究書としての質を維持しつつも、同時に、古典的な「入

⁵ 岩本和子『スタンダードと妹ポーリーヌ 作家への道』(青山社)2008, p.287。

⁶ 鈴木昭一郎『スタンダード』(清水書院)1991, p.8。

⁷ 『スタンダード』が私の手元に送られて来た際に添付されていた「京都、1991年7月23日」(日にちのみ手書き)となっている先生ご本人の書簡からの引用である。

⁸ 鈴木昭一郎『スタンダード』, p.218。

門書」としての役割も十二分に兼ね備えていて、バルザック研究に疎い私にも極めて分かり易かったことと比べると、先生の『スタンダール』の特徴が一層、浮き彫りになる。

だが、学生は、時に、こちらが期待していた以上の能力を発揮する。それも、決して、珍しくないのだが、そのような発見が教師の醍醐味でもある。2000 - 2001年に『カストロの尼』を中心に、『イタリア年代記』も含めて、卒論を書いた学生の指導をした。江國香織や辻仁成が好きだと言った彼女は、同年代だった頃の私など足下にも及びそうもない文学少女だった。私は、彼女にも鈴木先生の『スタンダール』を「少し、難しいかも知れないけれど…」と断った上で、薦めてみた。入手が易しく、且つ、学生にとっても手頃なお値段の研究書は、やはり、数が限られるからである。程なく、卒論指導の時間に私の研究室に現れた彼女に「どう？読んでみた？難しくなかった？」と問う私に対して、彼女は、明るくはっきりとした口調で、目を輝かせながら答えたのだ。「とても面白かったです。」と。

鈴木先生は、『スタンダール』の「まえがき」の結びの部分で以下のように書いておられる。

このシリーズの総題は「人と思想」という。私はスタンダールの「人」の要素を最小限にしぼり、「思想」の部分を作成技法の解明にあてた。文学を、生活に密着した、人生の哀歌を歌うものと考えすることは必ずしも誤りではないが、それは読者の人生観の問題であり、おそらくは別の学問領域に属する。文学作品というものは、じつは日常生活のレベルとはまったく異質な、高度で精緻な構築物であり、魔性の人々のすむ世界であることがおわかり頂ければ幸いである⁹。

私自身は、先生のこの「文学観」に必ずしも、100%同感だと言う訳ではない。とは言え、「若い読者を対象とする」著作であったが故に、先生は、単なる「文学への誘い」では飽き足らず、ご自分で「文学の本質」と考えておられる領域まで、読者をして踏み込ませたかったからこそ、敢えて、ご自分のご研究の最新の成果を披露されることを選ばれたのではなからうか。

いずれにしても、先生の『スタンダール』を読んで、目を輝かせた私の学生は、「魔性の人々のすむ世界」に魅せられたひとりであろう。前述の、現在、トルコに在住している学生のことも含めて、そんな学生が居たことを、先生のご生前に、なぜ、先生にお知らせしなかったのか 私自身の怠慢と遅筆に、ただ、ただ、恥じ入るばかりである。

c) 「恋愛書簡」(『スタンダール全集(新装版)8 恋愛論・恋愛書簡』、人文書院、1977年、pp.389-457.)

⁹同上, p.9.

見知らぬ同業者から「ご専門はなんですか？」と問われた時、あたかも当たり前のように「スタンダールです。」と答えるようになって、どれだけの年月が過ぎたのだろうか？《Stendhalienne》でありながら、かなり長い間、私は、スタンダールの『書簡』を本格的に読み込もうとしなかった。きっかけを与えてくれたのは、他ならぬデル・リット氏が編纂された1993年刊の *Stendhal, Lettres d'amour*¹⁰ である。「ちょっとスタンダールに興味を抱いた女子学生が、彼が恋した女性にどんなラブレターを書いたのか、公園のベンチや電車（メトロ？）の中で読める本¹¹」と言った趣のある軽装のこの本が大変、気に入った私は、「書評」とも「随筆」とも稚拙な「論文」ともつかぬ内容を「愛の手紙 スタンダールの『恋愛書簡』に寄せて」と題した文章に纏めたことがある。当然のことながら、人文書院刊の全集に『恋愛論』と同時収録されている『恋愛書簡』の鈴木先生の手になる邦訳と「訳注」を重要な参考文献のひとつとした。そして、機会があったら、デル・リット氏編纂の小品を邦訳して、その拙文を解説として添えてみたいと思っていた。

再び、岩本氏の言葉をお借りしたいが ご承知のように、岩本氏は、長年、スタンダールの『書簡』、特に、ポーリーヌとの間で交わされた手紙のご研究に取り組んで来られた訳だが、お仕事を纏められるにあたって、「二〇〇年前のブルジョワ青年の手紙の文体もさることながら、若い女性の文章を現代日本語で違和感なく訳す作業においては、見直すたびに底なし沼に入り込むような恐怖感を覚えつつ終わりのないものに思われ¹²」たと書いておられる。計画倒れに終わってしまった私の場合、そこまで、真剣に悩んだ訳ではなかったが、しかし、「愛の手紙」である以上、翻訳をする折には、スタンダールの手紙と女性達の手紙とでは、はっきり文体を変えたいと思っていた。勿論、フランス語には、日本語に存在するような、性別による表現の差異がないことは承知している。しかし、学生時代から親しんで来たスタンダールの邦訳を読む度、ヒロイン達の、殊更、女性らしさを装った不自然な言葉遣いが気になって仕方なかった私は、逆に、私がスタンダールの手紙を訳せば、男性の目から見たら、おそらく、妙な日本語になってしまうだろう、と、それも、かなり警戒した。ならば、スタンダールの手紙については、鈴木先生の邦訳を使わせて頂こうか、いや、それでは、今度は、世代のギャップが出て来るかも知れない...、と、考えあぐねていたことを思い出す。

付け加えておかなければならないが、「愛の手紙 スタンダールの『恋愛書簡』に寄せて」を書いた時、参考にさせて頂いた鈴木先生のご業績は、『恋愛書簡』の邦訳だけではなかった。既に挙げた『スタンダール』の巻末の年譜に、先生は、Romain Colomb に宛てられた1841年6月19日付けのスタンダールの手紙

¹⁰ Stendhal, *Lettres d'amour*, Seyssel, Editions Champ Vallon, 1993.

¹¹ 寺西暢子「愛の手紙 スタンダールの『恋愛書簡』に寄せて」、『仏文研究』第28号(京都大学フランス語学フランス文学研究会)1997, p.26。

¹² 岩本和子『スタンダールと妹ポーリーヌ 作家への道』, p.284。

の内容の一部を引用しておられる。

「犬を二匹飼って、やさしくかわいがっている(…)なにも愛するものがなくて、淋しかった¹³⁾」

『スタンダード』を読んだ時から、この書簡の一節は、深く、私の心の中に残っていた。そして、「愛の手紙」を纏めるもうひとつの動機となると同時に、文章を結ぶための鍵ともなってくれた。にも拘わらず、私は、鈴木先生にこの拙文の抜き刷りをお送りしていない。振り返れば、様々な事情があったのだが、今、ここで、あまり余計なことは書きたくない。

(拙文の)「愛の手紙」の中で、私は、スタンダードの「恋愛」の意味を真摯に問いつつも、反面、従来のスタンダード研究において「ホモソーシャルな色彩を帯び¹⁴⁾」がちな部分に関して、かなり意識的に皮肉った。一方、鈴木先生は、ジュリアン・ソレルがなぜ、レナール夫人に発砲したのか、と言う問題について、「それは、彼女がジュリアンの恋を世俗の規範に引きおろし、二人だけの恋と信じたものの尊厳を犯したからに他ならない¹⁵⁾」と言う見方を示しておられる。私の「愛の手紙」を目にされて、先生は眉を顰められるのではないだろうか。抜き刷りをお送りしなかったのは、そうした危惧があったからだ、と、先生のご冥福をお祈りすることしか出来ない今、私は、誰に向かってでもなく言い訳している自分に戸惑っている。

d) 『日記』(『スタンダード全集(新装版)12 エゴチスムの回想・日記』、人文書院、1978年、pp.171-580.)

療養生活に入る前の2005年の春休み、私は『日記』についての論文を何とか纏めたいと思い、人文書院刊の第12巻に収録されている鈴木先生の「解説」を読んでいた¹⁶⁾。その時、施した赤鉛筆の傍線や、ところどころに貼り付けた付箋がそのまま残っている。『書簡』については、なかなか丁寧に読み込もうとしなかった一方、『日記』は、学部の三回生の折に、スタンダードの生涯について、曲がりなりにも知って以来、ずっと途切れることなく、小説・短編と並ぶ、私の愛読書だった。邦訳で読んだ時からの印象だが、『日記』を読んでいると、(通俗的な表現を使って恐縮だが)「わくわくする」のである。例えば、『赤と黒』を読んでいる時のように、物語世界に引きずり込まれて、忘我状態になる、と言ったような感覚とは全く異なる。圧倒されるような感覚ではないが、しかし、こころが弾むような、とても楽しい「わくわく」感である。

スタンダードの小説・短編は、常に、かなり意識的に語り手の管理下に置かれていることが多い。記憶に忠実であろうと、時系列的な進行が、絶えず、妨

¹³⁾ 鈴木昭一郎『スタンダード』、p.239。

¹⁴⁾ 杉本圭子「セミナー報告」、『スタンダード研究会会報』(2010)No.20、p.12。

¹⁵⁾ 鈴木昭一郎『スタンダード』、p.160。

¹⁶⁾ 『スタンダード全集(新装版)12 エゴチスムの回想・日記』(人文書院)1978, pp.xvii-xxvi。

げられる『アンリ・ブリュラーの生涯』は、断片的な印象を与えがちだが、小説化することを嫌う作者がしばしば介入することによって、作品は、それでも、ある枠の範囲内に収まっているように思える¹⁷。他方、『日記』は、野放図と言える程に、際限なく、自由に拡がって行き、その感覚が、私をして「わくわく」させてくれるのである。

なぜ、「わくわく」するのであろうか？ 第一に考えられるのは、『日記』の約三分の二は、スタンダールが「作家」になる前の青年期に書かれたものであり、初期の『書簡集』や『文学日記』などと共に、青春の息吹が感じられ、書き手の若々しさが窺える魅力的なテキストだから、と言う点であろう。とは言え、大切な「自己の記録」であるが故に、若きベールは『日記』のテキストが他者の目に触れることを常に恐れているし、自分も含めて、友人・知人に様々な変名を使ったのも、「目くらまし」としての役割を与える意味もあったのだと思う。だから、「管理」されていない訳でもないのだが、そこで、浮かんで来るのは、スタンダールの『日記』と言った場合、「資料体«corpus»」が絶えず、変容し、定まらない空間の中で漂い、膨らみ続けていることが、あの「わくわく」感の最大の要因なのではないのだろうか、と言うことだ。

しかるに、単なる一読者にとっては、大変、嬉しい「わくわく」感も、ひと度、その翻訳を任された身には、乗り越え難い壁に変貌したことであろう。一步間違えば、元のテキストの魅力を損ない兼ねない。「スタンダールの『日記』とはなにか？」「どれを日記とするかという問題がある。」「すべて日々に記されたものとしては「日記」である。」「『恋愛論』の「断章」のなかに、「日記」と考えられるメモは、はたしてないか？」¹⁸。人文書院刊の『日記』の「解説」の冒頭には、鈴木先生の自問自答とも取れるこうした呟きばかりが見受けられる。

『日記』の邦訳においても、鈴木先生は、優れた「職人技」を駆使して、スタンダールのテキストの生命を損なうことなく、読者に『日記』を提供することに成功された。「全訳」が不可能であったとは言え、「抄訳」を避け、1801 - 1805 年の一定期間の全訳を試みたことが、何よりの肝要な点であろう。少なくとも、あの「野放図な」テキストの雰囲気、部分的ではあるが、味わうことが出来る。自ら、セルクル・デュ・ビブリオフィル版のテキストを「翻訳者泣かせ」と呼んでおられるが、「解読できない部分を、分かったようには訳さなかった¹⁹」その先生の誠実さ故に、先生の訳された『日記』は、「生きたもの」となっているのだ。

この邦訳のお陰で、学部生だった私は、『日記』に出会い、『日記』を読む楽しみを遺憾なく享受することが出来た。特に、ベールがメラニー・ギルベール

¹⁷お断りしておかなければならないが、私は、未だ『アンリ・ブリュラーの生涯』の«édition diplomatique»や草稿そのものを本格的に検討したことがないので、この見解は、あくまで、「編纂された」文献を元にした限りのものである。

¹⁸『スタンダール全集(新装版)12 エゴチスムの回想・日記』(人文書院)1978, pp.xvii-xviii.

¹⁹『スタンダール全集(新装版)12 エゴチスムの回想・日記』(人文書院)、1978, p.xxvi.

に接近を試み、一喜一憂している件が気に入っていて、手元に残る人文書院刊の全集の余白には、『ベルサイユのばら』の真似をして習い覚えたイラストまで入っている（服飾の時代考証にこの「manga」が、大変、役に立ったのだ。）。若い二人の恋の行方が気になった私は、当時の指導教官の研究室に置かれていたセルクル・デュ・ビブリオフィル版の *Journal* の二巻を借り出して、鈴木先生の邦訳の続きを読もうと試みた。だが、残念ながら、語学力がついて行かず、諦めざるを得なかった。『日記』のテキストと真正面から向き合えるようになるのは、二度の渡仏を経た後のこととなる。

「スタンダール研究会」において、「新しい『スタンダール全集』を出さないか？」と言った提案が出されたことをご記憶の方々もおられると思う。実現するものなら、是非、『日記』に手を挙げたい、と想っていた。鈴木先生のご業績の恩恵を受けた者のひとりとして、その成果を示すような仕事が残せなかったことは、私の「stendhalienne」としてのキャリアの中で、一番のこころ残りのひとつである。

*

吉田城先生の急逝以来、私は用心深くなった。お世話になった先生方から頂いたお年賀状を丁寧にチェックする。お葉書が届いているか、筆跡に変化はないか、先生は、今年、おいくつになられるのだろうか、と、計算してみたりする。

今年のお正月、鈴木先生のお年賀状は、元旦に届かなかった。年が明けてから、呑気に年賀状を書いていた私は、気になって、先生宛の葉書に「心配している」と言っただけを書き送ったと思う。ほどなくして、先生からのお年賀状を頂いたものの、これまでと変わって、奥さまと連名になっており、また、表書きの筆跡は先生のものだったが、私の住所が、一部、間違っていた。「ご病気でもされたのではないだろうか？」と案じていた矢先の訃報であった。

鈴木先生がデル・リット氏を「師」と仰いでおられたような意味においては、私は先生を「恩師」と呼ぶことは出来ない。「文学」の捉え方も「文学研究」に対する姿勢もあまりに違い過ぎると感じるからである。だが、先生が「stendhalien」の先人である以上、そして、何より、私が先生のご業績に深い尊敬の念を抱かずにはいられない限りにおいて、私は、これから先も「鈴木昭一郎」氏を「先生」と呼び続けると思う。（2011年5月21日。）

*) 後日譚：2011年5月22日の朝、『会報』ご担当の杉本圭子さんに、21日付の原稿を送らせて頂いた。紙媒体の原稿は、この際、お送りしたものである（データ化するに際して、不正確と思われる表現等、細部を修正させて頂いた。）

（原稿をお送りして）その後の約十日間、私は、新しいパソコンを置く場所を確保するため、机の周辺を整理しなければならなかった。その際、積み上げたファイルや本の山の中から、「どこかにあったはずなのに...。」と見つけられ

ずにいた、鈴木先生の *Stendhal et le théâtre* の一部分をコピーしたものと、同時に、1984年の秋の試験で仏検の一級に合格した際、関西日仏学館から頂いた *La Dame aux camélias* のGF版が出て来た。「そう言えば、あの時(本を頂いた時)鈴木先生もおられなかっただろうか？」と疑問が浮かんだ瞬間、私は、思わず、大きな声で「あ...私、先生の授業を受けたことある！」と叫んで(?)いた。今のところ、確認の手立てがないのだが、おそらく、1983年の春から夏にかけてだと思うが、関西日仏学館で、鈴木先生の授業を取った記憶がある。Taineの『英文学史』を読んだのではなかったか？ と言うのも、「イギリス料理というのは、この世にないでしょう？アメリカ料理はありますけどね。マクドナルドです。あれは、アメリカ料理でしょう？でも、イギリス料理はないですよ。」と繰り返しておられたのは、私の頭に浮かぶあの声は、鈴木先生である。

とすれば、京大で講義を取らなかったのは事実であるし、デル・リット氏の来日講演についての経緯もここに書いた通りであるが、ただし、その講演の時に、私が「鈴木先生のお姿を、初めて、拝見した」と言うのは、私の記憶違い、ということになる。当節、流行の「断捨離」とは、およそ、無縁の私であるから、いずれ、家探しをすれば、事実関係がはっきりすると思うが、今のところは、何分にも記憶だのみの話なので、仮説を提示するに留める。

また、注1については、明白な誤りがあったため、訂正させて頂いた。注3については、岩本さん、住谷さんの追悼文を拝読して、研究会の足跡に関し、私の事実誤認があったので、これも文面を改めた。私は、芦屋で開かれていた読書会には(何度もお誘いを頂いたのだが、不義理をして)出席したことがなかったもので、失念していた。この場を借りて、お詫びしたい。

尚、鈴木先生のご業績について触れた部分については、もっと厳密に注等、詳細に添付した方が正確であるとは思いますが、この文章は、「論文」ではないので、煩雑にならないよう最低限に留めたことを申し添えておきたい。(2011年6月5日。)

【会員活動報告】2010年4月1日～2011年3月31日

井出 勉

「スタンダールと《国民詩人》ベランジェ」(Stendhal et le « poète national » Béranger), 『名古屋造形大学紀要』第17号、2011年3月31日、p.119-130.

内田 善孝

« Le portrait de Byron dans «Armance» et les journaux contemporains », *Bulletin of Seikei University*, Vol.44, No.22, september 2010, p.1-11.

(『成蹊大学一半研究報告』、第44巻第2分冊、平成22年9月)

« Le Patronyme d'Armance et l'affaire Zaffiroff », *L'Année stendhalienne*, no.9, juin 2010, Honoré Champion, p. 353-361.

小林 亜美

博士論文「スタンダールの小説における絵画的要素をめぐって - 美への約束から幸福への約束へ - 」

(« Les éléments picturaux dans les romans de Stendhal -- Promesse de la beauté - promesse du bonheur -- »)

神戸大学大学院 2010年3月23日提出、9月末に3月付で博士号取得

「スタンダールの初期小説における絵画的要素をめぐって- 『アルマンス』と『赤と黒』-」
(Les éléments picturaux dans les deux premiers romans de Stendhal - *Armance* et *Le Rouge et le Noir*-)、『関西フランス語フランス文学』第17号、2011年3月

下川 茂

「『アルマンス』のサディズム」(Le «sadisme» dans *Armance*)、『立命館文学』第620号石井 芙桑雄教授追悼記念論集、2011年2月、p.84- 96.

« Stendhal et Madame de Duras : le rousseauisme jacobin dans *Armance* », *H.B.*, no.15-16, Eurédit, janvier 2011, p.259-266.

田戸 カンナ

「スタンダールの小説創造 『アルマンス』の「外テキスト」について」(Sur le hors-texte d'*Armance*)、『学苑』第838号、昭和女子大学、2010年8月、p.1-15.

富永 明夫

「《ファブリスは来たか?》への補説一束」、『現代文学』82号、p.20-33.

ジュリー・ブロック

« Ôoka Shôhei, stendhalien », *L'Année stendhalienne*, no.9, Honoré Champion, juin 2010, p.363-381.

山本 明美

「スタンダールにおける<鏡の美学>と語りの技法：『バイアーノの修道院』著者考証 III」
『関西フランス語フランス文学』第 16 号、2010 年 3 月。

(L' « esthétique du miroir » et la technique de narration chez Stendhal : L'identification de l'auteur du *Couvent de Baïano* III, *Études de Langue et Littérature françaises du Kansai*, mars 2010.)

« État présent des études stendhaliennes au Japon (2007-2009) », *H.B.*, no.15-16, Eurédit, janvier 2011.

【編集後記】

東日本大震災、およびそれに続く一連の原発事故は、私たちの心に深い傷を残しました。東北地方の会員の皆様には心よりお見舞いを申し上げます。また、直接の被害はなくとも、ご家族、ご友人が被災された方もおられるかと存じます。ご心中、お察しいたします。そんな中、まずは例年どおり『会報』をお届けできましたことを、心より嬉しく思います。

かねてからご相談申し上げておりましたように、当方、学務の多忙化により、従来のように会員の皆様全員に紙媒体の『会報』を印刷、発送することが難しくなってきました。そこで思い切って今号(21号)より、原則としてメールをお使いの会員には、『会報』を電子データの形でお届けすることにしました。それ以外の方々、また事務局の方については、製本を簡略化したうえで、後日冊子をお届けいたします。また研究会のホームページ上には、従来どおり会員名簿のページを抜いたPDFファイルの形で掲載をする予定です。どうかご理解いただけますと幸いです。

これに伴い、年会費1000円の無料化を検討しております。方針が決まりましたら、またあらためてご連絡させていただきます。

*

震災の重苦しい余韻の続く5月初旬、思いがけずも鈴木昭一郎先生逝去の報を受けることとなりました。急遽、追悼のページをもうけ、数人の先生方からお寄せいただいた追悼文を掲載しました(この件に関し、会員の皆様に十分周知ができませんでしたことを、ここでお詫び申し上げます。)鈴木先生には京都の研究会の折に二度ほどお会いしたほかは、お言葉をかわす機会はなかったのですが、博士論文を書き始めたころ、お送りした論文の抜き刷りをお読みくださり、暖かい激励のお言葉をくださったこと、また『会報』を担当していた折、デル・リット先生逝去の報をいち早くお知らせくださり、電話口で「とうとうデル・リット先生が亡くなられてしまいましたよ」と、心底寂しそうなお声を出されていたことが、強く心に残っております。会員諸兄の追悼文からは、鈴木先生がフランス語教師として、文学研究者として、そのときどきに見せられたさまざまな表情をうかがい知ることができます。心よりご冥福をお祈りいたします。

(2011.5.23 杉本 圭子)